

英虞湾周辺における中世製塩遺跡の分布について

山 本 達 也

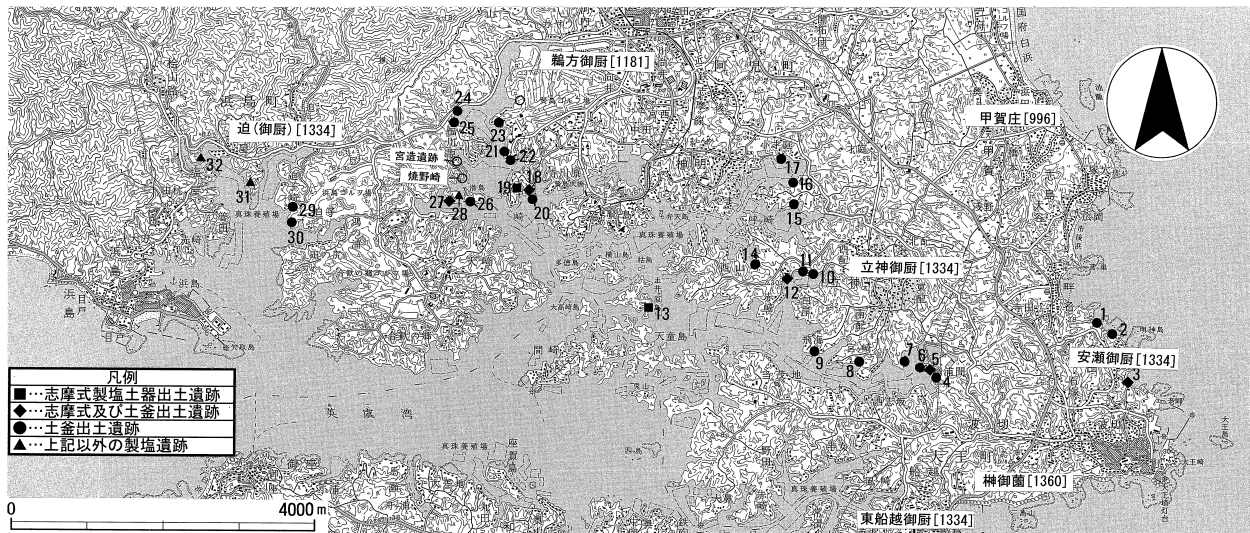
1 はじめに

志摩地域の製塩遺跡調査の本格的な調査を開始されたのは磯部町の伊藤保氏であった。⁽¹⁾ ついで昭和 43 年に行われた、志摩市（当時志摩郡）磯部町所在の小海製塩遺跡の発掘調査により、鉄釜を使用する製塩炉が確認された。⁽²⁾ それと同時に、同町内の城山製塩遺跡、塩崎製塩遺跡より出土した粗製土器についても検討を加え、これを塩の「煎熬容器」として位置づけ、「志摩式製塩土器」と命名された。さらに、志摩地方では古代末から中世初頭にかけて煎熬用土器と考えられる「土釜」と呼ばれる土製品が使用されるが、これとの関係について、同氏は「志摩式製塩土器→志摩式と土釜の中間型→土釜→鉄釜」という発達系譜を考えられた。⁽³⁾ これ以降、志摩式製塩土器は煎熬容器であるとの見方が一旦定着し、これを継承、発展させる形で新田洋氏らの研究が進められることになる。そして山本雅靖氏の研究により詳細な型式分類がなされると共に、その使用法についても煎熬容器ではなく固形塩生産容器とする見地から、生産・流通に一定の見解が示され、現在の研究の基礎となっている。⁽⁴⁾ 一方で土釜を利用した製塩については平成 9 年度に行われた紀伊長島町の道瀬遺跡の発掘調査で製塩炉が検出され、報告書で土釜に関する研究が整理された。⁽⁵⁾ その後、大川勝宏氏は、土釜、製塩炉をそれぞれ三型式に分類され、その分布について考察すると共に、土釜の所属年代については山茶碗の型式から 12 世紀末から 13 世紀初頭に使用の上限を認め、下限は小海製塩遺跡例などから鎌倉末から室町時代ではないかとされている。そして、神宮の御厨、御菌との関連について、「土釜製塩についても律令国家の衰退と在地勢力としての神宮との関係を考えなければ、この時期に顕現する当地域の製塩を説明する事はできない。神宮領である御厨・御菌は当地でも開発が進められており、製塩炉が見つかった各遺跡も何らかの形で御厨・御菌と関連づけられる位置にある。」と、御厨・御菌との関係について述べられている。⁽⁶⁾ その後、清野陽一氏らは紀伊長島町に所在したと推測される丹島御厨、中島御厨内での製塩の実情を検討し、操業が約百年間と短期間で製塩炉の発見数も少ないという状況から、恒常的な塩生産ではなく、御厨の貢納物として塩が生産されていたとしても非常に限定された一時的なものであったとし、御厨周辺の森林資源の活用も視野に含めてその消滅の考察をされている。⁽⁷⁾

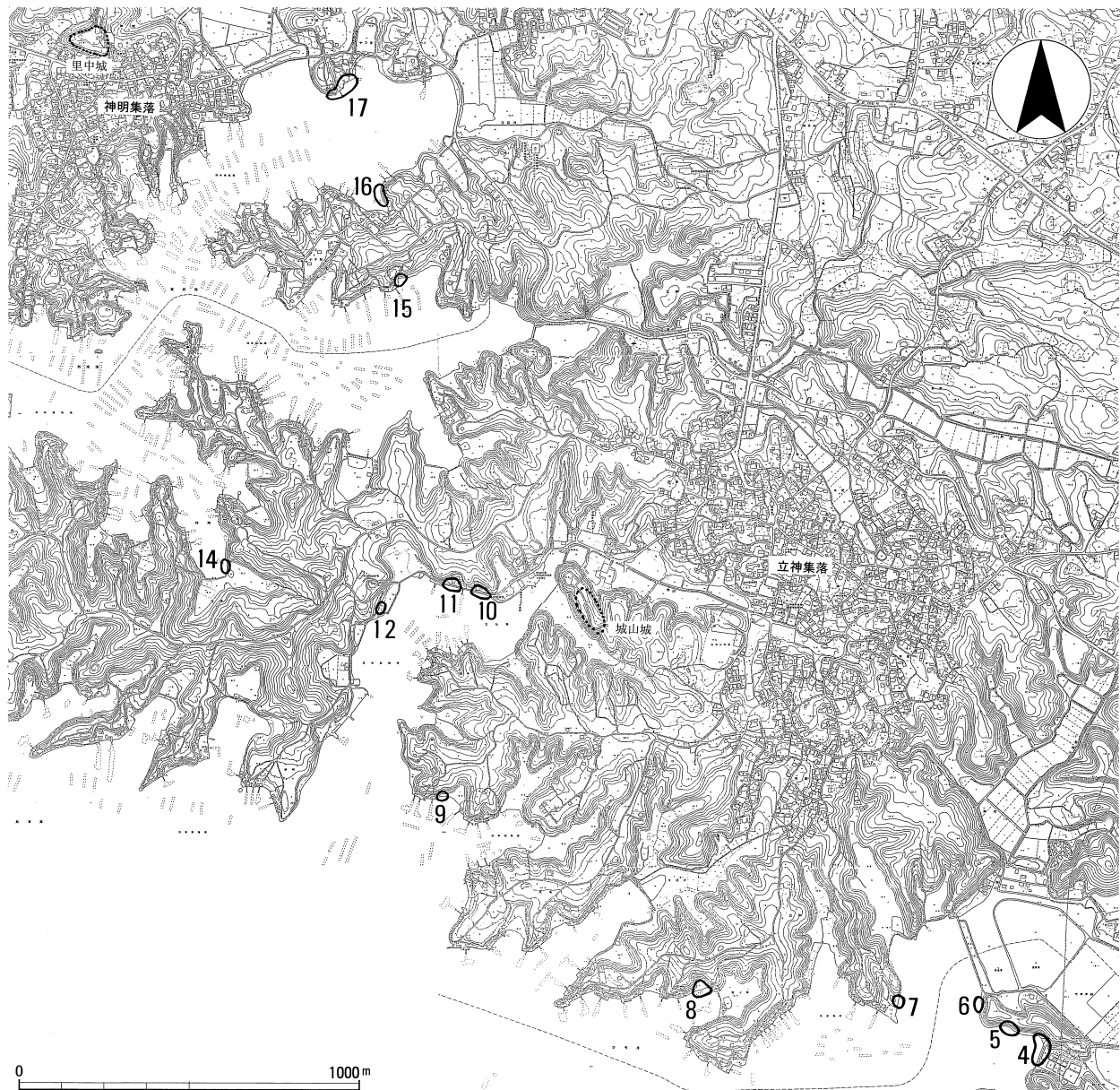
平成 17 年には志摩市の立神高岡製塩遺跡の発掘調査が行われ、製塩炉の一部が検出されるなどしたが、その詳細な構造までは明らかになっていない。⁽⁸⁾ ただ、新名強氏はこの土釜片の出土状況などから、炉体や天井に角礫を用いた製塩竈上に土釜を据えたものではないかと推定されている。また、塩の生産者について牢人など他地からの入植者の可能性を提起されている。⁽⁹⁾

以上の研究は、紀伊長島町道瀬遺跡の発掘調査を出発点とし、土釜を用いた製塩に関して各種見解が示されたものであるが、実際に発掘された製塩遺跡が少なく、発掘されても不明な点が多いという制約から、多くの推論の上に成り立っている。また、遺跡数そのものも、当地域での海岸部の詳細分布調査が少ないので、本章では大川氏が「何らかの形で御厨・御菌と関連づけられる位置にある。」としたことが英虞湾を中心とした地域でも当てはまるのか、当てはまるとすればどれほど明確であるか、そして道瀬遺跡やその周辺の製塩遺跡が 12 世紀後半から 13 世紀前半を中心とする、わずか 100 年程度の期間の操業とみられるような状況が果たしてこの地域でも当てはまる事象なのか考察してみたい。⁽¹⁰⁾

なお、本稿の多くは拙稿『製塩遺跡の研究』（平成 17 年度皇學館大学博士前期課程修士論文）を基礎とし、その後の史料調査結果などを加えている。⁽¹¹⁾



第1図 英虞湾周辺製塩遺跡位置図 (S = 1 : 100,000) (国土地理院 1 : 50,000 「波切」「贅浦」より作成)



第2図 立神地区周辺製塩遺跡位置図 (S = 1 : 20,000) (阿児町都市計画図より作成)

2 英虞湾沿岸域における土釜製塩遺跡の分布状況

志摩地方の製塩関係資料は、山本雅靖氏の研究以降、紀伊長島町周辺の資料蓄積があるほかは、目立った増加を見せていない。しかし、前述のように伊勢・伊賀地域での志摩式製塩土器出土例は増加するといった状況で、志摩地域での実態解明が求められている所である。⁽¹²⁾そこで筆者は、志摩地方の全海岸を踏査して製塩遺跡を新たに確認し、志摩地方における製塩遺跡の実相を明らかにすることを計画し、2005（平成17）年4月より逐次踏査を行っている。しかし、遺跡の多くが海岸に立地するという事情から、干潮時でなければ調査不可能な箇所が多く、少しずつ調査を行なわざるを得ず、思ったほどの進捗を見ていない。さらに、英虞湾内、特に先志摩半島北岸などは海岸線の埋め立てによって真珠養殖施設が建設されている所が多く、砂浜自体が非常に少ない状況であった。的矢湾も状況はそれほど変わらない。一方、太平洋岸は、遺跡として登録されている場所はあっても、伊勢湾台風以降に建設された堤防などによって遺物包含層などは今となっては全く確認できない遺跡が大半であった。以上のような事情により、調査の中心と考えていた英虞湾内で一通り調査を終えた海岸は三割程度にとどまっている。

現時点で明らかになっている英虞湾周辺の製塩遺跡は一覧表及び第1図の通りである。一覧表中で山茶碗の後に附記した数字は藤澤良裕氏の編年の型式を示す。⁽¹³⁾なお、本文中で使用する遺跡番号は表・図1・2と共通であり、表でアミカケになっているものは全て新出のもので遺跡名は字名を元にした仮称である。

以下、遺跡が集中して見られる4地区の主要な製塩遺跡について見る。

①名田周辺地区（第1図参照）

大野製塩遺跡（1）は、名田集落北方の大野浜南端付近に位置する。土釜・土師器を採取した。平成16年度の堤防改修工事後に確認したが、大半が工事で破壊されてしまった可能性が高い。本遺跡南東約200mに位置する真名井神社裏遺跡（2）では、崖面に露出する、土師器甕（平安末）・山茶碗（4～5型式）、などが出土する同一の層位より、1点だが土釜片を採取している他、大井ノ浜遺跡（3）でも土釜が出土している。

②立神周辺地区（第2図参照）

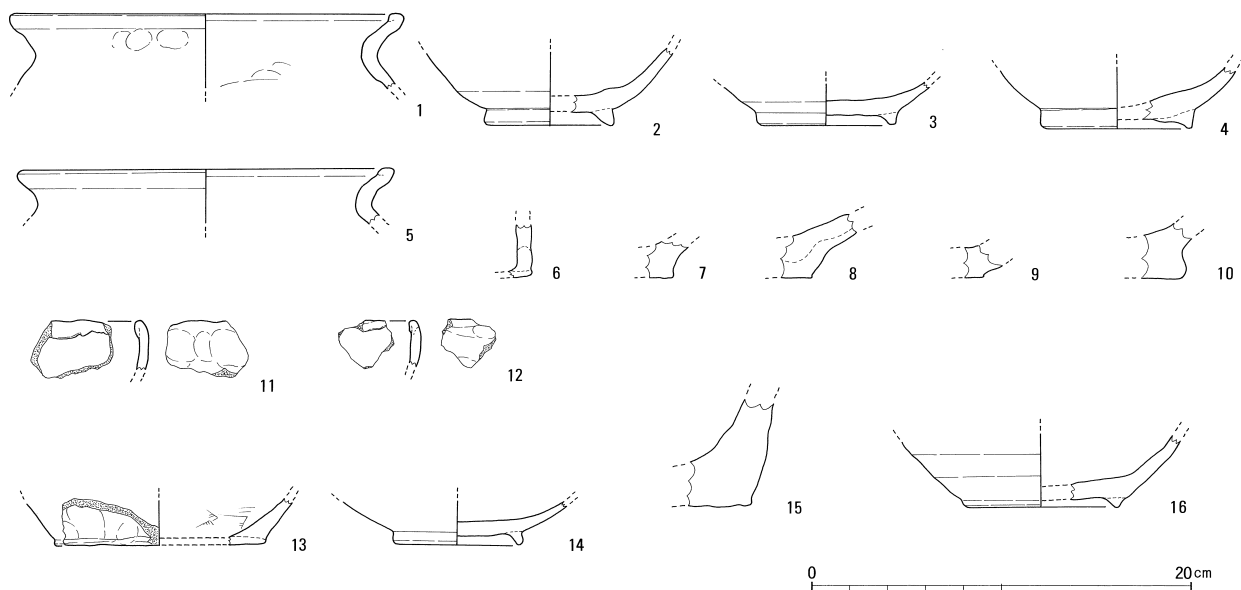
立神集落南方の阿鎌浦周辺には鰯浦間A～B製塩遺跡（4～6）・飯倉製塩遺跡（7）がある。鰯浦間B製塩遺跡では遺物包含層が海岸に露出し、同一の層位より土釜と志摩式製塩土器を採取している。飯倉製塩遺跡では土師器甕（第3図1）を採取している。立神高岡製塩遺跡（12）では発掘調査により16箇所の硬化面、土師器甕・山茶碗（4～6型式）土釜・志摩式製塩土器が出土している。筆者も山茶碗（第3図3・4）、土師器甕（同5）、志摩式製塩土器（同6）、土釜底部（同7～9）を採取している。この遺跡の西方には西神島A・B製塩遺跡（10・11）があり、海岸に土釜・焼け石が散布する。山茶碗（第3図2）を採取している。杓浦製塩遺跡でも土釜底部（第3図10）を採取している。集落の北方には小才庭A～C製塩遺跡（15～17）があるが遺構は確認されず、海岸に土釜・焼け石が散布するのみである。土井ヶ原島遺跡（13）では従来知られていなかったが志摩式製塩土器（第3図11～13）を多数採取した。この他土師器・須恵器・灰釉陶器（同14）・黒色土器を採取し、焼け石も多量に認めたが土釜は全く見られなかった。

③鵜方周辺地区（第1図参照）

焼ノ崎製塩遺跡（18）は、古くからその存在が知られており、英虞湾内の製塩遺跡としては比較的良く内容が分かっている遺跡で、脚台式製塩土器なども出土している。この遺跡の北方には宇島製塩遺跡（21）があり、土釜片（第3図15）を採取している。また、この近傍にてタチメ製塩A・B遺跡（22・23）を確認している。A遺跡のある岬は、「志摩郡阿児町神明字「ヤキノ崎」の考古学的調査」によると「この遺跡の南方に、大畑氏の真珠養殖場のある俚称「カマハナ」、観光ホテルの北方下の俚称「カマダニ」には、製塩の遺跡があり、その地名が物語っているが、焼け石なども決して少なくない。」とある。⁽¹⁴⁾また、阿児ライブラリー所蔵の「字地図 第十七区 鵜方村」（明治時代

番号	遺跡名	所在地	志摩式	土釜	その他遺物	遺構	備考
1	大野製塩遺跡	志摩市大王町名田字大野		○	土師器	焼石散布	H16年工事で全壊
2	真名井神社裏遺跡	志摩市大王町名田字うなた		○	土師器甕 山茶椀(4~5)		土釜片は1点のみ
3	大井ノ浜遺跡	志摩市大王町名田字大井ノ浜	B I 類	○	土師器 須恵器 山茶椀	炉跡	
4	鰯浦間A製塩遺跡	志摩市大王町波切字鰯浦間		○	土師器	焼石散布	主要部堤防下か
5	鰯浦間B製塩遺跡	志摩市大王町波切字鰯浦間	A類	○	土師器	焼石散布	包含層露出
6	鰯浦間C製塩遺跡	志摩市大王町波切字鰯浦間		○		焼石散布	遺構浸食で全壊か
7	飯倉製塩遺跡	志摩市阿児町立神字飯倉		○	土師器甕	焼石散布	主要部埋立て下か
8	宮ヶ崎製塩遺跡	志摩市阿児町立神字宮ヶ崎		○		焼石散布	主要部埋立て下か
9	白岸製塩遺跡	志摩市阿児町立神字白岸		○	山茶椀	焼石散布	包含層露出
10	西神島A製塩遺跡	志摩市阿児町立神字西神島		○	土師器 山茶椀(4)	焼石散布	主要部道路下か
11	西神島B製塩遺跡	志摩市阿児町立神字西神島		○	山茶椀(4)	焼石散布	主要部道路下か
12	立神高岡製塩遺跡	志摩市阿児町立神字高岡	A類	○	土師器甕 山茶椀(4~6)	製塩炉6基	H17年度本調査
13	土井ヶ原島遺跡	志摩市阿児町立神字土井ヶ原	A I 類		土師器 須恵器 灰釉陶器	焼石散布	包含層露出
14	杓浦製塩遺跡	志摩市阿児町立神字杓浦		○		焼石散布	遺構浸食で全壊か
15	小才庭A製塩遺跡	志摩市阿児町神明字小才庭		○		焼石散布	主要部埋立て下か
16	小才庭B製塩遺跡	志摩市阿児町神明字小才庭		○		焼石散布	遺構浸食で全壊か
17	小才庭C製塩遺跡	志摩市阿児町神明字小才庭		○		焼石散布	遺構浸食で全壊か
18	焼ノ崎製塩遺跡	志摩市阿児町神明字焼ノ崎	○	○	土師器 須恵器 灰釉陶器	炉跡	
19	焼ノ崎B製塩遺跡	志摩市阿児町神明字焼ノ崎	?			焼石散布	
20	焼ノ崎C製塩遺跡	志摩市阿児町神明字焼ノ崎		○		焼石散布	主要部埋立て下か
21	宇島製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字タチメ		○	土師器甕 山茶椀	灰層・焼石散布	包含層露出
22	タチメA製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字タチメ		○	土師器 山茶椀(4~5?)	焼石散布	主要部埋立て下か
23	タチメB製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字タチメ		○		焼石散布	
24	長原A製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字長原		○		焼石散布	遺構浸食で全壊か
25	長原B製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字長原		○		焼石散布	
26	滑島製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字滑島		○	山皿	焼石散布	
27	畔杯山A製塩遺跡	志摩市浜島町迫子字畔杯山	?	○	灰釉陶器	焼石散布	
28	畔杯山B製塩遺跡	志摩市浜島町迫子字畔杯山			須恵器	炭・焼土包含層	包含層露出
29	安目浦製塩遺跡	志摩市浜島町迫子字安目浦		○		焼石散布	
30	網引付島製塩遺跡	志摩市浜島町迫子字網引付島		○	焼土塊 山茶椀(6)	焼石散布	
31	蔵本製塩遺跡	志摩市浜島町塩屋字蔵本				炭・焼土包含層	鉄釜製塩?近世か
32	寺廣製塩遺跡	志摩市浜島町塩屋字寺廣				製塩炉	鉄釜製塩?近世か

遺跡一覧表（トーン部分は新発見の遺跡）



第3図 遺物実測図 (S = 1 : 4)

以降に作成?以下「字地圖」)には、本遺跡の所在する小岬に鉛筆書で「釜鼻」と註記があり、また遺跡東方の谷地は「釜谷」と記されているので「志摩郡阿児町神明字「ヤキノ崎」の考古学的調査」に記された地点が本遺跡であることは明白である。この地名がいつ頃まで遡れるかは不明だが、鈴木氏が述べられるように恐らく製塩に関わるものであり(近世にも小規模な製塩が行われていた可能性もある)興味深い史料である。B遺跡では微細片であるが山茶碗(4~5型式?)を採取している。滑島製塩遺跡(26)は滑島南岸に位置し、遺物は干潮時に露出する砂浜に見られる。海岸には部分的に、炉跡と推定される被熱で赤変した岩盤が露出しており、遺構主要部は既に浸蝕されてしまったようである。表採遺物は土釜(煤が付着しているものがある)、山皿、炉の一部と思われる焼土塊があり、焼石も多数見られる。

阿児町と浜島町の境界となっている小岬は、「字地圖」によれば「焼野崎」と註記があり、神明の字焼ノ崎に所在する製塩遺跡群とその地名から考えると、ここにも製塩遺跡が存在した可能性もあるが、踏査では何らの遺物も確認されていない。ただ、この岬の北約200mの東向き海岸には宮造遺跡が存在し、志摩市教育委員会保管の「阿児町遺跡調査カード」によると、「開墾のとき炭灰が相当量出たといっている」とあり、ここは製塩遺跡である可能性を指摘出来る。

④迫子周辺地区(第1図参照)

安目浦製塩遺跡(29)は従来、大崎半島西岸における唯一の土釜製塩遺跡であったが、この南方に網引付島製塩遺跡(30)を確認した。山茶碗(6型式)(第3図16)を採取している。本地区における土釜製塩遺跡はこの2遺跡のみであるが、鉄釜を使用したと考えられる寺廣製塩遺跡(32)を確認した。海岸の北端に赤く焼け締まった製塩炉の一部と思われる遺構が露出し、周辺の岩盤も赤く変色している。炉の全体形状は不明であるが焼石が多量に認められる。付近には「釜ケ谷」や「釜向ケ」などの地名が見られ、同種の製塩施設が他にもあったと見られる。⁽¹⁵⁾

3 土釜製塩遺跡と荘園の分布

前節で述べた土釜製塩遺跡の分布と、当該地域の御厨の分布を第1図に示した。御厨については、『日本荘園データ1(畿内・東海道・東山道)⁽¹⁶⁾』によった。荘園名に併記してある数字は史料上の初見年である。これを見ると、立神御厨(神宮領。『神鳳鈔』初見)、鵜方御厨(神宮領。『神宮雑書』初見)、迫(御厨)(神宮領。『神鳳鈔』初見)の近傍に土釜製塩の遺跡が偏在する傾向があることが分かり、大川氏の指摘に合致する状況と言える。

立神御厨周辺の製塩遺跡は主な岬や入江ごとに分散しているように見え、一見散漫な印象を受けるが、これらはいずれも立神集落を中心とした半径約2kmの円内にほぼ収まり、集落に居住した生産者が集落縁辺部の海岸で生産に携わっていたと考えられる。立神集落各所では当該期以降の土師器・山茶碗の散布が認められる。そして、集落近傍のある一箇所に集中して生産施設を設けず分散しているのは、燃料確保のための山林(塩山)の領域の関係上、ある程度の間隔を置いたためであろう。或いは、新名氏が指摘するように他地からの入植者が製塩を行い、そうした生産者が集落周囲の海岸で生産活動を行っていたためにこのような分布になっているとも考えられる。「平家の落人が立神に逃れてきて最初に海岸で塩をつくり生活を始めた」という地元の伝承もこうした事実を一部反映している可能性があり、あながち軽視できまい。その場合、製塩施設と御厨の関係を再考する必要があるが、これは今後の課題としておきたい。

鵜方(厳密には鵜方浜と呼ばれる入り江付近)周辺では、比較的集中した分布を呈している。中心となった集落は現在の市街地に重なると思われるものの、はっきりとした範囲は分からない。また、鵜方浜最奥部は埋め立てが著しく、旧海岸線は踏査不可能な場所が極めて多いので、調査は必ずしも十分ではない。

一方で現在、立神と鵜方の中間にある神明集落に明らかに付随すると見られる土釜製塩遺跡は見られない。神明集落周囲で中世前期の遺物や遺跡が確認されていないことからすれば、当該期には組織的に製塩を行うほどの人間

が住む集落が存在しなかった可能性が高い。『遺跡台帳』によれば集落内に「奈良時代以降」とされる貝塚が何箇所か集落内にあるが、「遺跡調査カード」などによれば、遺物は「甲賀式土器（概ね中世後期の南伊勢系土師器鍋を指す）」などがあり、土釜製塩が行われていた中世前期のものではないようである。

迫子周辺から塩屋にかけての地帯は、地名から調査当初はかなりの製塩遺跡数が考えられたが、土釜製塩遺跡は合計2箇所しか見られなかった。まだ大崎半島には未調査の海岸が多いことから、調査次第では更なる増加が見込まれるが、立神・鵜方周辺よりは小規模な生産であった可能性もある。また、その場合「塩屋」の語源は、こうした土釜製塩ではなく、恐らく近世の寺廣製塩遺跡に見られるような土釜を使用しない製塩施設からであろう。

以上の遺跡の内で古代末から中世の製塩遺跡は各遺跡の概要で述べた通り、年代の明らかなものは概ね11世紀代から13世紀中頃と思われるものであった。一方で、小海製塩遺跡の発掘で指摘されているような鎌倉末期から室町時代まで及ぶような事例は確認出来なかった。恐らく、小海製塩遺跡の場合、平安末から鎌倉初期の土釜製塩遺跡が存在したのと同じ場所に、室町時代に鉄釜製塩の施設が設けられたのであろう。以上のような動向は、前述したような紀伊長島町周辺の製塩遺跡の動向と概ね同じであり、このような塩生産が志摩半島～東紀州の荘園近傍においてほぼ同時に発生し、衰退したと考えられる。

4 おわりに

平安末期から見られる土釜製塩遺跡は、御厨との関係は以前から指摘されていた。しかし、紀伊長島町周辺の事例がそのまま志摩半島にも当てはまるのかという点は、磯部町を除くとはっきり確認されておらず空白地帯の様相を呈していた。この点について英虞湾沿岸の踏査により、数多くの新出遺跡を確認する成果を挙げるとともに、その遺跡の分布は御厨の分布とよく符合することと、操業年代も紀伊長島とさほど変わらないということが明らかになった。しかしながら、現時点での海岸部の踏査状況は到底充分とはいえず、今後も継続して踏査活動を行ってゆく所存である。また、今回取り上げた新出遺跡の内容については紙幅の関係上、大幅に割愛せざるを得なかった。いずれ稿を改めて詳細を報告したい。

【註】

- (1) 伊藤保「磯部考古学」(『磯部郷土史』1973)
- (2) 磯部町教育委員会『小海』1976
- (3) この土製品については「塩崎式製塩土器」「土製平釜」等の名称があるが、本稿では「土釜」で統一した。
- (4) 近藤義郎「日本塩業史の考古学的研究」(『土器製塩の研究』青木書店 1989)
- (5) 山本雅靖「志摩式製塩土器考」(『考古学論集』第三集 考古学を考える会 1990)
- (6) 三重県埋蔵文化財センター『道瀬遺跡(第1次)発掘調査報告』1998
- (7) 大川勝宏「紀伊半島における中世製塩遺跡」(『研究紀要 第9号』三重県埋蔵文化財センター 1998)
- (8) 清野陽一・西川麻野・服部英世「紀伊半島の製塩遺跡―御厨における塩生産―」(『紀伊長島町の研究』三重大学 2001)
- (9) 三重県埋蔵文化財センター『立神高岡製塩遺跡』2005
- (10) 新名強「中世製塩から見た南伊勢」(『Mie History』vol.18 三重歴史文化研究会 2006)
- (11) 『紀勢町史』編纂にあたり、紀勢町(現・大紀町)の海岸部を含む町内全域で分布調査が行われているのが数少ない例である。
- (12) 西村美幸「伊勢湾西岸の製塩土器―研究の現状と課題―」(『シンポジウム製塩土器の諸問題―古代における塩の生産と流通―』塩の会シンポジウム実行委員会 1997)
- (13) 藤澤良裕「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994)
- (14) 鈴木敏雄「志摩郡阿児町神明字「ヤキノ崎」の考古学的調査」(『郷土志摩』26 志摩郷土会 1954)
- (15) 迫子記念誌刊行委員会編『波座湖 迫塩の教育と民俗』(迫子財産区 1979)
- (16) 『日本荘園データ1 (畿内・東海道・東山道)』(国立歴史民俗博物館 1995)
- (17) 筆者の祖母の話による。